

第4回「今後の区立図書館のサービス・配置のあり方検討会」概要

1 日時・会場

(1) 日時

令和4年（2022年）12月9日（金）18時30分～20時45分

(2) 会場

中野区役所 5階 教育委員会室

2 出席者（敬称略）

コーディネーター	野口 武悟 庭井 史絵
委員	佐藤 清一郎 藤井 美江子 松本 克二 高橋 博行 佐崎 さゆり 奥村 満智子 松下 智子 田中 和喜 鈴木 辰也 柴田 健剛
傍聴者	0名
事務局	鈴木 正実（中央図書館） 渡邊 健治（子ども・教育政策課長）他2名

3 会議概要

(1) 資料説明（子ども・教育政策課長）

- 前回質疑事項補足説明
 - ⇒ 学校図書館蔵書冊数・貸出冊数。
 - ⇒ 各ライブラリー貸出冊数（自館蔵書貸出冊数、予約図書受取冊数）。
 - ⇒ 電子書籍分類別割合。
- 検討会での主な意見
 - ⇒ 「図書館の配置」、「図書館の施設」、「図書館のサービス」、「電子書籍」、「地域開放型学校図書館」の区分によりとりまとめ。

(2) 質疑・意見交換等

- ◇ 今後のスケジュールに、教育委員会の議決とあるが、地域開放型学校図書館の個別の取扱も、その場で決定するのか。
 - ⇒ 今回の検討会のテーマが、「今後の図書館サービス展開の方向性」、「それを支える施設配置の条件」、「地域開放型学校図書館の検証とあり方」、「電子書籍の動向と導入条件」であるように、個別具体的な対応の前提となる考え方を整理し、その後の個別的な展開に活かすための計画である。
- ◆ 今回の検討趣旨は理解したが、令和小学校には、すでに地域開放型学校図書館スペースもあり、また桃園第二小学校はこれから改築となる。実際、どのタイミングで明確になるのか。現在進んでいるプロジェクトの扱いはどうなるのか。
 - ⇒ 今回の検討会を踏まえた計画は、あくまであり方であり、今後の個別検討の基礎となるものであるが、ご指摘の趣旨については十分に踏まえて進めていく。
- ◇ 区がまとめた主な意見にお気づきの点、追加してほしい点があったら出してほしい。また、これまで意見が少なかった「図書館司書のあり方、今後期待する専門性」などに

についても意見を出してほしい。

- ◆ 図書館司書の司書率と正規職員の割合はどの程度か。
⇒ 中央図書館の60名の内、正規社員40名、準社員（パート社員）20名で、双方合わせ司書率は60%を超えている。
- ◇ 社員に対する教育が質の向上に結びつく、その辺はどうなっているか。
⇒ 図書館における基礎的な分類、蔵書構築などを学ぶ入社研修の後、年数や実力に応じたステップ研修や毎月の館内研修などを実施している。
- ◆ 司書資格取得のサポートはあるか。
⇒ 金銭的な支援は現状ないが、資格取得の際、集中研修参加のための休暇取得などの支援は行っている。
- ◇ 教員を目指す学生が減っていると聞いているが、司書についての傾向はどうか。
⇒ ある大学では、資格取得をしても就職先が少ないため減少傾向であり、別の学校では変わらず横ばい状態である。
教員志望者の減少とは違い、司書課程においては横ばいである。ただ、児童サービス論などの実技を伴う科目で資格取得をあきらめる学生が一定数いる。図書館運営にはコミュニケーション能力が不可欠だが、カウンター業務だけと思って入ってくる学生もいる。
- ◆ 小学生の図書館見学、中学生の職場体験はどの程度の頻度か。
⇒ 10月、11月に集中する傾向があり、児童担当は週5日のうち3日対応することもある。また、最近で私立校からの話も増加しているが、基本的には受け入れる方向にいる。
- ◇ 中学生くらいの年代が図書館司書を魅力的だと思わないと、優秀な司書は増えていかない。図書館で働きたいという人を増やす取り組みが大切である。
- ◆ 司書の専門性、個性の拡充が必要ではないか。どういう本がその人のニーズに合っているのか、そのような提案をする人が図書館にいることの発信、また学校への出前など積極的に行ったらどうか。発信していき、接点を増やすことが大切。池袋の書店で、本のタイトルを消してポップで選ばせるブックカフェ個人の感性を優先することでの集客方法もあると聞く。
- ◇ 中央図書館にもレファレンス担当はいるが、直接の利用者以外には伝わらない。調べの達人に関する発信が必要。
- ◆ 学芸員は表に出てくるが司書は表に出ないといった傾向を感じる。イベントを開いて、直接司書から説明を受けられるといったイベントもいいと思う。
⇒ アカデミック系の事業は参加率が良くなく、図書館をよく利用する人が参加している傾向なので、それ以外の人を呼び込む工夫を行っていきたい。
- ◇ 委員の中で図書館のイベントに参加した人はいるか。
- ◆ 講演会や映画会へ参加したことがある。

- ◇ どういう講座があれば参加するのか。
⇒ 一步踏み込んだ「まち」の成り立ちなどの講演会は面白いと感じる。
- ◆ 本を探してほしいと思っても、忙しそうで声かけをためらってしまう。相談カウンターや案内係などがいると声を掛けやすい。
⇒ ご指摘のとおりで、中央図書館でも予約室やカウンター整備に際して、正面玄関前にインフォメーションコーナーをつくり、可能な限り人がいて案内を行うようにしている。すべての館で同じ対応はできないが、気軽にお声かけしてほしい。
- ◇ 新宿区立中央図書館 50 周年記念イベント「本がわたしの手に届くまで」に先日参加した。様々な工程を経て作られる本について、作家・校閲者・印刷業者・書店・図書館、それぞれのプロが講演するというもので、図書館の回に参加した。図書館の本をどのように選書をしているか等がテーマで、選書室、閉架書庫の見学も質問もできた。中野区にも大人向けの図書館ツアー等があれば参加したい。
- ◆ 大和町の地区まつりで、歴史好きの方々が古地図の配布や歴史の話をしており、大変興味深かった。杉並区でも同様の催しがあり、地図をもらってきた。ここに昔、川があった、暗渠になっていたなど想像することの楽しみがあるようだ。
⇒ 図書館では過去の写真を募集して今との比較を行う展示を行うなどしている。また、「ちいきの写真館」ということで、昨年は鷺宮地域の写真をアーカイブ化して公表した。また、区役所移転に際し、広聴・広報課と連携し、区報等で使用した古写真も「ちいきの写真館」に今後掲載していく予定である。
- ◇ AI が普及したら司書はいらないとか、電子書籍なので司書の介在は必要ないという意見もあるが、単純な窓口サービスを越えたところに、これからの図書館サービスがある。時代とともに司書の役割が変わってくる。
- ◆ 家族に頼まれて図書館に行くが、目的の本を探すときに自分はすぐ人に聞くが、娘は検索機で探して、見つからなかったときにそのまま帰ってしまう。一緒に探してくれる雰囲気欲しい、特に子どもにとって、話しかけるといことはとても難しい。
- ◇ カウンターにいるというのではなく、フロアにいて、図書館員から声をかける工夫をしてほしい。カウンターで聞くことは、結構ハードルが高い。中野東図書館では行っているようだが、他でも実施して欲しい。
- ◆ 10 年前に対面室朗読室にかよひ、2 週間に 1 回読んでもらった。カウンターからの誘導などが自然な人がおり、「今日、その人がいたらいいな」などと感じた。誘導の仕方、椅子への座らせ方、障害特性は人により様々だが、最低限、誘導、優しい日本語などのスキルを持っていると図書館へ行きやすくなる。
- ◇ 中央図書館には対面朗読の専門家がいるのか。
⇒ 受付や機器操作は図書館員も行うが、対面朗読そのものはボランティアで対応している。

- ◆ 全館でWi-Fi 利用可能か。
 - ⇒ 全館で利用できるが、場所により使用できないところはある。
- ◇ デジタルに関して特に人によってレベルが違う。現在電子書籍がどうなっているのか知りたいといったニーズがあるかなと感じた。先日電子書籍に関するイベントに参加したが、課題については、本検討会でも出ていて自分の考えていたことが一緒だと感じた。周りの図書館がどうしているかなど、課題を把握してほしい。前回都道府県単位での導入例が紹介されたが、単独の自治体で導入するより広域の都道府県単位での導入がいいのかなと思う。デバイスの使い方等から始めた方がいいと思う。
- ◆ 高齢者もスマホは持っているが、使用方法が分からないときに近くに携帯ショップがあっても、自分の契約している通信会社とは違って聞けないといったことがある。図書館も本の専門家であるとともに、情報の専門家として色々な相談を聞いてもらえると嬉しい。
 - ◇ スマホと高齢者、高齢者会館でまつりを開催し、そこに区の ICT サポーターが来て、いろいろ質問できたことがあった。電子書籍が進むと、図書館にいけば基礎から教えてもらえるという仕組みがあると良い。友愛クラブとしても、組織的に図書館の PR を進めたいので、情報や出張サービス等もお願いしたい。
- ◆ ICT サポーターと図書館員と一緒に講座等を行うことも望ましい。高齢者会館で Zoom 形式の事業を行うとき、すべてを ICT サポーターが行ってくれた。
 - ◇ 高齢者の催しで、人生 100 年時代というが、これからは人生 120 年時代だと参加高齢者が最近よく言っている。人生への意欲を感じる。元気で長生きすることと読書を切り離したくないと思う。高齢者会館の利用者が先日中野東図書館に行って、びっくりしたし、楽しかった、ああいう図書館もあるんだねとという声を聞いた。引きつける魅力作り、高齢者のコーナーやイベント、高齢者向けの推薦図書やその作家の講演会など、高齢者の図書館としての居場所としてもなしてほしい。
- ◆ 視覚障害者はサピエ図書館を使う。自分自身、司書に頼んで本を探すと言うことが、頭から消えかかっていた。外出にハンデがあっても、家にこもらず図書館のような公共の場に出向き新しい刺激をもらうことは大切。団体に共有していきたい。
- ◆ 今後の図書館のカギは子どもの図書館利用なのだろうと思う。将来の図書館ユーザーになってくる。
- ◆ 居場所としての図書館。複合施設で児童福祉の専門家がいる自館がある。独りで図書館にいる子どもは孤立しがち、そこで児童福祉と図書館の接点。相談に行きやすさや問題把握のポイントになるのではないか。
 - 大人であれば、歴史とフィールド、その土地の本といった 3 つがあると、没頭する。自分は今、中野学校について読んでいる。資料も多いので、どこから読むのか分からなくなる。そのようなイベントがあると参加したいと思う。中野区なら囲い町など犬の歴史やその解説本がどこかにあると良い。
- ◆ 多摩地区の図書館では館内で地域支援とコラボして認知症相談を行っているところもある。誰でも気軽にいけることが理由としてある。専門窓口だと躊躇するが、図書館な

らふらっといける。関連本を近くに展示できることも良い。

- ◆ 司書が選んだ本を読むイベントとして、福袋というものがある。子育ても終わり、自分でも読書の時間がとれるが、さて何を読むかというときに、新聞の書評等から探すことも良いが、司書が選んだ本を読めることは良い。そういう目的で選んだのかなど、そういうところに司書の個性が出てくるので、そういう役割もいいなと思う。
- ◆ 図書館員は個性を表に出さない、司書は表に出ないように感じる。それと対照的なのは学芸員。学芸員は専門性を出している。講座の話も出たが、外部講師を呼ぶ講座だけでなく、図書館員が行う講演会というのも面白いと思うし、もっと司書の個性を表に出してもよいのではないか
- ◆ 図書館の司書率の維持には二つの側面がある。司書資格が必要な業務もあるが、コミュニケーション能力が不可欠な業務もある。必ずしも適格者が有資格者と言うことでは無く、利用者目線で見えた場合、この辺をどう考えているのか。
- ◆ 図書館を利用する場合に、司書資格の有無を気にして利用はしない。むしろ、胸に歴史好きとかかいてある方が、質問しやすかったりする。司書資格に拘る必要はないように思う。その場で分からなくても、一緒に悩んでくれれば良い。
- ◆ 書店の店員はよく勉強している。店員が選ぶベストテン、素晴らしい人がいる。資格より努力で役立っている人も多い。
- ◆ 館長がふさわしい人を選べば良いと思う。採用後、資格取得のサポートを館内からぜひともしてほしい。
- ◆ 先日司書の話を知る講座を受けたときに、苦労話等を聞いて、親しみを持てた。また、次回訪問した時にはその人に話しかけたいなと感じた。イベントなどで司書と話す場面をもっと増やすのもいいと思う。PR 活動は課題と感じる。PR について、ポスターなどは公共施設にもはっているのか。
⇒ 区内公共施設にも貼らせてもらっていて、かつ区の掲示板にも張っている。Twitter もやっているが、広報については課題だと感じている。
- ◆ 広報はどこの自治体も問題だと感じていることが多い。ブックスタート事業のおかげで、赤ちゃんとお母さんには情報が届いていることが多いが、それ以降、継続的に図書館とつながる機会が必要。保育園などを通しての情報提供をするべきではないか。
- ◆ 40年前から語りかけをやっている。最近では、お話会に親子で来る人が増えた。お父さんも、その本を読んだということで、親子の話題になり、本を読むということがある。子どもの頃に本や図書館に親しむと。大人になってから図書館に戻ってくる。また、図書館員についていえば、お話し会に1名付くが、どんだんうまくなっていると感じる。何事も挑戦していくことが大事と感じる。
- ◆ 中三と中一の子どもがいる。初めて図書館に行ったのは、上の子が2歳の時。家にいるのがつらいとき、いつもは公園だが、公園は冬は寒いし、雨の時使えない。図書館が子育て世代の居場所として助かった。週末に図書館に行くと、知らない子とも親し

くなる。本を通してということもあるが地域の親子の居場所として続いて行ってほしい。

- ◆ みなみの小学校で、開校イベントで PTA によるイベントの景品として学校図書館の本を「もう一冊借りられる」券を子ども達に渡した。途中で増刷となるほど人気があった。大人が思っている以上に本好きな子どもは多い。ずっと好きでいてもらいたい。
- ◆ 図書館のあり方でこれが正解というのではないと思う。色々なチャレンジを繰り返してほしいし、可能性を感じる。
- ◆ 南中野の7町会と児童館で、かっぱまつりというイベントをやった。700名くらいの参加があり、その防災コーナーに起震車が来たが、南台図書館も参加して防災の本の展示を行うなどタイアップした。地域の図書館の魅力作りを団体などでも共有していきたい。
- ◆ 高齢者調査をやっているが、新型コロナウイルス感染症拡大の前から孤立は多い。内向的な人、体調の悪い人は出かけていかない。近場でスマホを教えてくれたり、日常生活で困ったときに相談できたり、みんなつながりを求めている。図書館は本を借りるところというのは固定観念で、誰でも来ることができる図書館という視点では、包括的に関われるというのは図書館の大きな魅力だと感じる。
- ◆ 図書購入経費7,000万円、14歳未満の貸出冊数が下から3番目などの実績を見た。貸出を増やすなど実績を残さないと予算は増えなかったりすると思う。貸出返却場所等についてもお金がかからない方法もある。また、子どもたちにもっと聞くべきではないか。ハイティーン会議等で、どういう図書館が使いやすいかなど子どもたちにも意見をもらったかどうか。
⇒ 中高生に参加してもらって「図書館活性化プロジェクト」を始めているところである。
- ◆ 電子書籍については、中野区の中途半端な予算では、結局中途半端。長野県では、システム整備は県、コンテンツは市町村。東京都でもそういう形はできないか。東京都にももっと力を入れてほしい。
- ◆ 多文化サービスの視点も入れてほしい。紙で多言語は難しい、電子書籍の多言語読み上げコンテンツなどの活用を期待したい。また、この検討会のように、図書館を考える常設の会議体をつくってはどうか。